



Title	ミシェル・ルボンと「日本文芸抄」
Author(s)	畠中, 敏郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1963, 13, p. 1-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミシェル・ルボンと「日本文芸抄」

畠 中 敏 郎

Michel Revon et son *Anthologie de la
littérature japonaise*

HATAKÉNAKA-Toshio

Sommaire

Comme spécialiste européen de la culture et surtout de la littérature japonaises, Michel Revon est beaucoup moins connu au Japon que quelques-uns de ses devanciers anglais ou allemands qui presque tous ont séjourné dans notre pays comme lui-même. Avant lui, Aston et Florenz avaient publié, chacun de leur côté, l'histoire de littérature du Japon; Chamberlain, Dickins et d'autres avaient fait plusieurs commentaires et traductions éminentes de genres et oeuvres littéraires. Mais avant Revon aucun Européen n'avait entrepris de publier dans sa propre langue une anthologie générale de la littérature japonaise. C'est lui qui le premier la publia à Paris en 1910. Revon a tâché de choisir les auteurs qui représentent le mieux l'esprit indigène et, de ces auteurs, il a cité les morceaux les plus typiques. Il les a traduits le plus exactement possible, "photographié" comme il dit lui-même. Il a pris soin de donner des explications préliminaires pour chaque époque, chaque genre, chaque oeuvre et de compléter sa traduction de notes très détaillées. De plus, son *Introduction* de vingt pages constitue une vue générale de l'histoire de la littérature japonaise. Elle fait aussi comprendre l'esprit dans lequel les Européens s'intéressaient au Japon après la Guerre russo-japonaise et aussi elle précise l'intention et la méthode de l'auteur pour la rédaction de ce livre. La conclusion, ainsi qu'une partie des notes, en sont surtout significatives et mériteraient des remerciements de la part des Japonais bien que l'auteur s'y montre parfois un peu trop sympathique envers le Japon et fasse en certains cas preuve d'une indulgence que seule peut excuser son grand amour de notre pays. En tout cas son *Anthologie* répond bien aux deux buts qu'il s'est proposés : recueil synthétique et méthodi-

que et histoire sommaire de la littérature.

L'intention de Revon était si originale que ce livre, tant en France qu'à l'étranger, n'a pas encore, à ma connaissance, été remplacé jusqu'ici. Depuis sa publication, cette *Anthologie* n'a pas manqué d'être citée dans les bibliographies de livres européens sur l'étude de la culture et surtout de la littérature japonaises. D'autre part, ceux qui étudient les éléments extrême-orientaux qui existent dans les littératures européennes attestent toujours de l'influence de ce livre sur les oeuvres de leurs pays. Ces raisons m'ont fait prendre Revon et son *Anthologie* comme sujet d'étude.

- I Sa vie (p.3)
- II Ses oeuvres, surtout celles qui concernent le Japon (p.5)
- III Aperçu de l'*Anthologie* (p.8)
- IV Etude et critique de l'*Anthologie*: (p.13)
 - 1. De l'avant-propos de l'*Introduction* (p.13)
 - 2. Devanciers européens (p.14)
 - 3. Aides et collaborateurs (p.16)
 - 4. Méthode adoptée pour le choix des textes (p.18)
 - 5. Méthode de traduction (p.22)
 - 6. Transcription en lettres romaines (p.24)
 - 7. Erreurs et mises au point (p.26)
- V Conclusion (p.28)

On est obligé d'admettre que cette anthologie, très soigneusement préparée, est traversée de la première page à la dernière d'un sentiment intensément sympathique au Japon et aux Japonais; c'est ce qui constitue la grande caractéristique de ce livre et, par le fait même, de son auteur. C'est, en même temps, ce qui répare les erreurs et les insuffisances qui se trouvent dans cette oeuvre.

フランス人 Michel Revon ミシェル・ルボンの *Anthologie de la littérature japonaise* 「日本文芸抄」といふ書は、今日のわが国においても、非常に稀なものとはいへない。昭和三十七年十月に、全国の国公私立大学（歴史が古く、なるべく仏語仏文学などの専攻課程のあるところ）十三、代表的な公共図書館三、日本にあるフランス側の研究教授機関三の、計十九の施設に

対して、この書の所有の如何を照会したり自ら赴いて査べたところ、つひに回答のなかった一大学（そこには在庫してゐないらしいことが推測せられた）を除いて十八の返事を得たが、中で所有してゐると答へてくれた所が六ある。照会しなかった施設で所持の向もあらうし、その他に個人でも、私の知る限りでさへ、既に二人の所有者がある。しかし、日本の文化、日本の文芸を深く研究した外国人、特に欧米人としては、サトウ E.Satow、アストン W.G.Aston、チェインバレン B.H.Chamberlain などのイギリス人、フローレンツ K.Florenz などのドイツ人に比べて、この抄の編著者ルボンの名は日本に知られることが少い。しかも、日本文芸の全体を総合的かつ系統的に一冊の中に収めて、選集と文芸史との二つの機能を發揮させたものとしては、このアントロジーは今日までも私の知るところでは唯一のものといへる。さらにルボン以後、欧米においての日本文学の文献としては必ずといってよいほどこの書の名が挙がってゐるし、これが欧米文芸自体の制作に与へた影響もその後の研究が証明してゐる。このやうな意味で、この著者とその著書とをここに取上げてみることにした。

(一) 生涯

1857（慶応三）三月二十四日、ジュネーブに生れた。父はフランスのAnnecy アヌシーの博物館長をしてゐた（ジュネーブとアヌシーとはお互にごく近い）。アヌシーで中等教育を終へ、Grenoble グルノーブルの大学に学び、docteur en droit 法学博士となり、弁護士をする。このときの学位論文は後に記する。ジュネーブ大学で民法を講じ、パリで attaché au parquet du procureur général となる。後者は今日のわが国流には最高検察庁附といふところか。ここまでの年月の詳細は査べてゐない。

1892（明治二十五）（東京）帝国大学法科大学外国教師として日本に来る。当時わが政府は、イギリスに物理学者を、ドイツに化学者を、フランスに法学者を、それぞれ一人ずつ求めたといふ。さうしてルボンがこの選に与つたのは、フランス全国の法科大学競争試験に首位を得たためである。加へて、わが明治の法律を語る場合に必ず名の出るボアソナード（G.Boissonade）は1895まで東京にをり、かつてグルノーブル大学教授として多分ルボンの師でもあつたらうから、その推挙にもよつたかも知れない。当時ルボンは北仏 Douai ドゥエー出身の Madeleine Dutilleux マドレーヌ・デュティウと婚し、その結婚の日に日本へ妻と相携へて出発した。この東京赴任に関しては、わが総理府官房の記録では「明治二十六年一月雇入、帝国大学法科大学教師（奏任取扱）」としてあり、これは1893にあたるから、ここに一年のずれが見出される。フラ

ンス側などの記録ではいずれも1892となつてをり、ルボンの令息 Louis Revon ルイ・ルボン氏も、「父が東京へ行ったのは1892だと思ふがたしかではない」と私に書いてをられる。フランスの学年は昔も今も中秋に始まって初夏に終るし、当時わが国でも少くとも大学では秋をもって新学年の開始期とするやり方をとつてゐたから、ルボンは恐らく1892の秋に出発して、年末または翌1893の初頭に來日したのであらう。さうして、手続の関係などで採用の記録は一月になつたものと思はれる。なほ、現東大法学部の方では、明治二十九年から三十一年に至る二個年間の在職記録しか判明しなかつた。二個年ごとに契約を更新したのが、この分だけ記録に残つてゐるのである。

同年（明治二十六）三月から司法省法律顧問（勅任取扱）を兼ねる。この勅任取扱はルボンも得意としたものの如く、後述の *Qui êtes-vous?* に対する自らの回答にも *Tchokounine* (*Fonctionnaire de 1^{re} classe*) 勅任（第一級官吏）としてゐる。

ルボンは、職務のかたはらパリ大学文科大学へ *Etude sur Hokusai* 「北斎の研究」及び *De Arte florali apud Japonenses* 「日本人における花道について」の二論文を提出し、1896七月二十一日の *soutenance* 公開口頭試問会を経て、フランス國家の *docteur ès lettres* 文学博士の稱を受けた。この試問には本人自ら出席の必要があり、たしかにそのために夏期休暇を利用して一時帰仏したことは、わが国の記録には確め得ないが、子息ルイ氏が間違ひないと断言してをられる。勿論当時の旅行であるから、片道一ヶ月をはるかに上廻る船路によつたのである。

1899（明治三十二）滞日中の功勞のため九月六日附で叙勲三等賜瑞宝章となり、その月中旬頃出発して、フランスへ歸る。同年十一月一日附で、パリ大学文科大学の *chargé du cours d'histoire et civilisation des peuples d'Extrême-Orient* 遠東諸國歴史文明講座囑託講師に就任。

1919（大正八）五月一日附、*professeur adjoint d'histoire et civilisation japonaises* 日本歴史文明講座助教授。現在では *professeur adjoint* といふ職名は見受けないが、今の *maitre de conférence* に当るものであらう。

1920（大正九）十一月一日附、同 *professeur titulaire* 正教授。

1937（昭和十二）三月三十日附退官。これまでのパリでの住所は、永く30 rue de Lille(7e)で、なほパリから近い Le Moutier d'Orgéus ル・ムティエ・ドルジュリュス（セーヌ・エ・ワーズ県）に別荘を有した。退官してからは、同じくパリから遠くない Chaucoin ショクワン（セーヌ・エ・マルヌ県）で悠々自適の生活を楽しんだ。第二時大戦となり1940ドイツ軍にその *petit château* の立退を命ぜられて近くの友人宅へ移り、1944ドイツ軍撤退とともに屋敷へ歸る。

1947（昭和二十二）ごく短い間病んだのち一月十日逝去、死ぬまで日本を深く慕つてゐたとい

ふことである。

ルボンは明治三十二年に日本を去ってから再び来日してゐない。また、日本以外の国へ大きな旅行滞在をしたことは生涯全くない。夫人は昭和三十七年十月十六日、パリ近郊 Suresnes シュレーヌで八十九歳の高齢をもって世を去った。いづれも日本でまうけた四人の子があり、Marie マリ、Thérèse テレーズ、Micheline ミシュリーヌの三女と末男ルイと。うち姉二人はすでに病歿し、第三女とルイ氏とが健在である。ルイ氏は国有鉄道に永く勤めて *ingénieur en chef honoraire* 名誉技師長の称を得て退職し、今は *Compagnie générale de télégraphie sans fil* 無線電信公社の部長を勤め、かたはら非行少年の更生福祉施設 *Centres familiaux de jeunes* を主宰してをられる。

(二) 著 書

ルボンは元來法律の専門家であるから、日本へ渡来するまでは、その著書の大部分はこの方面のものであった。

イ. 渡 日 前

1889 *L'Université de Grenoble* 「グルノーブル大学」 グルノーブル, X. Drevet 刊, 三十八頁。

1891 *Le Droit de la guerre sous la République romaine* 「ローマ共和国における戦争法規」及び *Les Syndicats professionnels et la loi du 21 mars 1884* 「職業組合と1884年三月二十一日の法律」 この二つはグルノーブル大学法科大学へ提出した学位論文で、併せて *Faculté de droit de Grenoble* の名のもとに、四百三十二頁の本となって、パリの A. Rousseau からこの年刊行。

1892 *L'Arbitrage international, son passé, son présent, son avenir* 「国際仲裁裁判, その過去, 現在, 将来」 パリ, A. Rousseau 刊, 本文五百四十一頁。この書で *Académie des sciences morales et politiques* 精神政治科学アカデミーの *prix Bordin* ボルダン賞を受けた。また, *Joseph de Maistre* 「ジョゼフ・ド・メーストル」パリ, *Nouvelle Revue* 発行所刊, 四十四頁, でアカデミー・フランセーズの *prix d'éloquence* 散文賞を得た。

ロ. 滞 日 中

1894 *George Sand* 「ジョルジュ・サンド」で、アカデミー・フランセーズの同じく散文賞を受けた。この賞の性質から見て、これも小論であらう。この年代は *Qui êtes-vous? 1924* のルボン自身の回答によるが、百科辞典 *Nouveau Larousse illustré* の補遺及びそのもう一つ新しい版 *Larousse du XXe siècle* には、いずれも 1897 としてある。パリの Bibliothèque Nationale の所蔵図書目録にもこれだけは載せてゐないので、正確には判らない。

1896 *Philosophie de la guerre* 「戦争の哲学」 Saint-Quentin サン・カンタンの A. Dubois 刊、五十二頁。同年、前述の日本についての学位論文 *Etude sur Hokusai* 「北斎の研究」及び *De Arte florali apud Japonenses* 「日本人における花道について」が、いずれもパリの Lecène, Oudin et Cie から出た。百四十八頁といふ後者は見たことがないが、前者即ち「北斎の研究」について一言する。序説、本文に北斎作品の年代順一覧を付け、これら全体で三百六十三頁。ヨーロッパにおける日本美術特に浮世絵の発見に続いて、フランスでも L. Gonse ゴンス、S. Bing ビングなどの日本美術についての書が出たが、特に *Edmond de Goncourt* エドモン・ド・ゴンクール の *Outamaro* 「歌麿」、*L'Art japonais* 「日本美術」、*Hokusai* 「北斎」は、著者の文壇的盛名のためもあって、よく知られた。そのうち最後の「北斎」と同年に刊行せられたのが、このルボンの著である。本文は、*L'Artiste* 「人」、*L'Oeuvre* 「作品」、*L'Art* 「芸術」の三部に分れ、北斎以前の日本美術から説起す。序説には、明かにゴンクール等を指すと思はれる「ヨーロッパ人の賞讃には一つの信仰のやうなものがある。外観上技巧上の美はしばしば讃へられたが、批評家はこの芸術家の常に精妙で的確な意図、その絵の母体たる理念を知ってゐない。」といふやうな個所があり、日本へ行き、その作物を生出した文明の真髄に触れ、日本人の心理を究める必要のあることを強調する。本文の結論としては、伝統美術を高しとして北斎を過小評価する日本人の見方が不当なのと同様に（今日のやうにわが国で浮世絵の値打が高まる前の時代であった）、ヨーロッパ人の浮世絵乃至北斎に対する過褒も亦正しくないとし、北斎の長短両所を挙げて締括する。大体において妥当な議論であると考へられる。

なほ、ルボン自身は *Qui êtes-vous? 1924* に、1900 の出版として *L'Art floral au Japon* 「日本の花道」といふ仏語名の著書を挙げてゐるが、パリの Bibliothèque Nationale の調査によれば、前記ラテン語表題 1896 のもののほかに、このやうな書が別に出版せられたことは考へられない、といふ。ルボンの私家特別な出版で広く行はれなかったものか、あるひは彼の記憶違ひか書違ひであらう。

ハ. 帰 仏 後

1900 *Histoire de la civilisation japonaise. Introduction* 「日本文明史。序説」 パリ, A. Colin 刊, 本文百五十五頁。明治三十五年(1902) (東京) 同文館刊, 森螻堂(順正) 訳「日本文明史」の原本である。ルイ氏は、この書が東大での嘗ての同僚、法博梅謙次郎に献せられたものといふ。梅の序のある訳書に依ると、文明の意義や研究法を説くに詳しく、宍から捌(八)に至る章のうち、最後の捌でやうやく *Application à l'histoire de la civilisation japonaise* 「日本文明史に於ける応用」と題して、始めて日本のことに入り、この章は訳本でわづかに三十三頁の内容をもって終る。この後その本論が出版せられた証拠は見つからない。

1904 *Le Japon moderne* 「近代の日本」 Amis de l'Université de Paris パリ大学友の会でこの年一月二十一日に行った講演, パリの C. Naud 刊, 二十九頁。同年, パリ大学の学内雑誌 Université de Paris の三月号に *Les Moeurs et l'esprit des étudiants japonais* 「日本学生の風習と精神」を寄稿。

1904—1907 *Le Shinntoïsme* 「神道」。これは *Annales du Musée Guimet* (ミュゼ・ギメーはパリにある、遠東関係の博物館) の一部として発行せられる雑誌 *Revue de l'histoire des religions* 「宗教史雑誌」に全号をあげて 1904 から 1907 へかけて掲載せられたもの。十五、六頁の *Introduction* 「序説」について *Première partie: Les Dieux du Shinntô* 「第一部、神道の神神」が始まり、その章は *L'Origine des dieux* 「神神の起原」から *La Fin des dieux* 「神神の終末」に至る七章三百九十一、二頁。さらに *Appendice* 「附録」及び *Index* 「索引」の計八十三頁がこれに加はる。「附録」は「古事記」からその冒頭「天地初発之時」の件 (*La Naissance du monde* と題する), 伊邪那岐命の黄泉国へ降る件 (*La Descente d'Izanaghi aux Enfers*), 及び天照皇大神の岩戸隠れの件 (*Le Mythe de l'Eclipse*) を採り、漢字、宣長の「古事記伝」に依る片仮名読みとそのローマ字転写とをしたもの。発行はパリの Ernest Leroux である。雑誌そのもので出たもの以外に、別に全部をまとめて同じ書店から 1905 に出した版があり、1907 に出た上記「附録」と「索引」とを併せて一冊とした号には、後者に依る通巻頁が索引の中に書いてある。この書も、第二部以後は発行せられた跡がない。

1908 *Les Anciens rituels du Shintô considérés comme formules magiques* 「魔術として観た神道の古儀式」1908 九月十八日、第三回国際宗教史学会、遠東之部での研究報告をまとめたもの。発行がオクスフォードの Clarendon Press であるから、オクスフォードで催されたものであらう。これだけは、平素一貫したルボンの神道の書方である Shinntô でなく n が一字になってゐるのは、彼が大勢に順応したものか、それとも学会の方で編纂上統一したものであら

う。同年、*Le Rituel du feu dans l'ancien Shintô*「古神道における火の儀式」。ルボン自ら「鎮火祭 *Ho-shidzoumé no Matsuri*」と副題を附してゐる。*T'oung-pao*（「通報」）の *Série II*, *Vo1. IX*, *Nº 2*の抜刷で、オランダ、ライデンの E.J.Brill 刊。以上二種、それぞれ十八及び二十四頁。

なほ、神道関係のものについては、後にいくらか触れるであらう。

1909 *La Politique étrangère du Japon contemporain*「現代日本の対外政策」 1909三月十日、パリの *Ecole libre des sciences politiques* 私立政治学専門学校の同窓会での講演、パリ、*Bureaux des questions diplomatiques et coloniales* の発行、二十頁。

1910 *Anthologie de la littérature japonaise des origines au XXe siècle* (Collection Pallas)「日本文芸抄、起原から第二十世紀まで」パラス叢書、パリ、Delagrave、1910刊。これから問題としようとするものである。以下また「日本文芸抄」と畧称する。

この書にはつぎのドイツ訳がある。あるひは他の国語にも翻訳せられたものがあるかも知れない。*Japanische Litteratur; Geschichte und Auswahl; von den Anfängen bis zur neuesten Zeit; übers. von P.Adler; Frankfurt*。実物を見てゐないので発行所は知らず、発行年代も不明である。

以上のほか、日本関係の日本人またはフランス人の仏文著書及び翻訳書に与へた序文の類が若干あり、その中には坪内逍遙の「役行者」（仏訳名 *L'Ermite*）へのものもあるし、他にも小さな著訳はいくらかあらう。しかし、この「日本文芸抄」発行の後なほ二十七年間もパリ大学で日本学の講座を担当してゐたにもかかはらず、一篇の相当な著訳書も挙げてゐないのは、それまでの彼の健筆と発表欲とから見て、甚だ奇異の感がある。ルイ氏も、父君がこの後身辺に特別な事情を持ったことを何も記してをられないだけに猶更である。ともかく、法学については私は全くの門外漢であるから、ルボンの前半生に多いその方面の著述に関しては何の言もなし得ないが、後半生を捧げた日本学関係についていへば、やはりその学位論文である「北斎の研究」と「神道」と、さらに純文学的なものとして、翻訳が主ではあるが「日本文芸抄」とを推さねばならない。

前掲「日本文明史」のほか、明治から大正へかけてわが国の著書や雑誌に載った彼の法学、神道、俳諧についての若干の翻訳や紹介が存するが、ここには一々列挙しない⁽⁴⁾。

(三) 「日本文芸抄」概説

本書は、1910を初版とし、1928の第六版まで同じ書店から刊行せられたことは明かであるが、

その後更に版を重ねたかどうかは詳かでない。私の直接知ってゐるのはその第二版、第五版、第六版であるが、後の二つの版は完全に同体裁同内容で、白地表紙に黒活字、ただ表題の一部 *Littérature Japonaise* といふ文字と、発行所の *Librairie Delagrave* の名とのみが赤活字になってをり、この体裁は、同じドラグラープ版のパラス叢書の他書と同様である。一方第二版の方は、水色表紙に黒活字で、これもこの叢書の、一つ古い様式であることが判る。恐らく初版も第二版と同じ形のものであらう。表紙の、著者名の肩書（ヨーロッパ流には名前の下へ書くから下書といふべきか）には、齊しく *Ancien professeur à la Faculté de droit de Tôkyô/ Ancien conseiller-légiste du Gouvernement japonais/ Chargé du cours d'histoire des Civilisations d' Extrême-Orient à la Faculté des lettres de Paris* とあるけれども、タイトル・ページの方は、第二版が表紙の通りであるのに対して、第五、第六版の方では、最後のものは *Professeur à la Faculté des lettres de Paris* と、その時の現在の資格が書いてある。また、内容では、第五、第六版には明治天皇が1912（明治四十五年）に崩御になって大正天皇の御世になったこと、昭憲皇太后が1914（大正三年）にお隠れになったことが脚注にあるが、これらは第二版には存在しないし勿論初版でも同様であらう。このやうな当然でごく少い訂正や増補を除いては、各版ともほとんど変りはないものと認められる。

内容は、冒頭二十頁の *Introduction* 「序説」に続いて、各時代分けの本文と脚注となり、その後が人名、書名、件名などの十五頁の詳細な *Index* 「索引」で終り、「序説」より本文、本文より脚注と、一段づつ小さな活字を用ひてある。

「序説」はさらに、題のない前置と、I（「索引」には *Méthode suivie dans cet ouvrage* 「この書の方針」）とII（同じく *Coup d'oeil sur l'histoire de la civilisation japonaise, dans ses rapports avec l'évolution littéraire* 「文芸の進展と対照した日本文明の歴史の一瞥」）となる。以下この「序説」を摘要するが、特に前置の部分はある程度忠実な翻訳を試みた。私見と補足とはすべて括弧の中に加へておく。

前置。日露戦争における勝利は、今まで日本の平和な発展を軽蔑してゐた傲慢なヨーロッパを驚かせ、ヨーロッパ人は日本の武勲を甚だしく称讃するやうになった。二千年にわたる文明の精華も、協調的な賢明な政策も果し得なかつたことを、大砲の数発が一瞬にして完成した、といふわけである。あれほど長い間価値を知られなかつた遠い島国の民は、急に文明諸国の仲間入をする資格があると判定せられた。彼等はそれを心から喜ぶとともに、ある種の驚きをもおぼえてゐる。しかし、（欧米には）その愚かな熱狂のために日本人の皮肉を買った連中は別として、かうした事件を通じて、日本国民が強固な物質的及び精神的文化、独自の才分、深い心情を有するこ

とを見抜いてゐるたもつと思慮深い人々もあった。これら思慮に富む観察者たちは、矛盾した日本観をいよいよ増加せしめてゐる著書出版物の中にたしかな光を見出すことがほとんど出来ないので、かくも種々さまざまに評価せられてゐる日本人なるものの価値はどんなものか、彼等の精神の根本的特色は何か、彼等はいかに感じ、いかに考へてゐるのかを知りたいといふ望みを捨ててゐない。それを知るただ一つの道は、日本の文芸を研究することである。

I 日本の文芸は世界でも最も内容豊富なものの一つであるが、残念にも至難な言語で書かれてゐるので、西欧人にはその全体を把握することが困難である。けれども彼等はそれに努力し、特に日本文芸の若干の部分については見るべき研究をなした。第一にアストン、チェインバレン、(F.V.) Dickins ディキンス、サトウなどのイギリス人、さらに Rudolf Lange ランゲを先頭とする何人かのドイツ学者によって、多くの原典がすでに解明せられた。一方、文芸史も、日本においては芳賀(矢一)、藤岡(作太郎)などのものが、ヨーロッパではアストンが1899(これは1898とすべきである)に先鞭をつけ、1906にフローレンツがもっと完全なものを公けにした。しかし今日まで、日本人の長い思考感情の歩みを伝えるに足る多数広範囲の原文を通じて、直接に日本文芸を判断させようとする選集は、どんな西欧語に於ても成されたことがない。これが本書の目的である。文芸史の説明の例として原文を引くのでなく、原文を縫うて文芸史の説明を置くやり方である。

ここには、日本精神を最もよく代表する作者、または特筆すべき種類の作者を第一義とし、多くの第二流の作者はこれを省いた。また各篇については、最も日本人の心をよく表してゐる典型的なものを選び、一見歐洲人の興味を呼びさうなものでも、これにかなはぬものは避けた。その選択で疑義の生じた場合は、日本古来の選集乃至近ごろの鈴木(暢幸もしくは弘恭?)落合(直文?)両氏または三上(参次)高津(歙三郎)二氏の選んだものに助けを求めた。

翻訳については、正確のみを目標とした。しかし日本語のいひ方は語義が甚だ漠として、各種の解釈を与へ得ることが多い。さらに千二百年以上の間には語の変遷が劇しくて、古人今人の註解によつても、日本人自体意を正しく捕へ得ぬことがある。またそれを捕へ得たにしても、そのニュアンスをフランス語でいかに表すか至難のことが少くない。それでもなほ、ある場合には、*photographier la pensée indigène*「現地人の思考を写真にとる」ことに成功した。例へば詩歌の訳では、しばしば語と語とは原文と等しく、行と行とは常に等しい。かうするためには、自分の作家としての自尊心を捨て、優雅を正確の犠牲とした。

この方法の与へる不満を補ふものは説明的な註を多くすることである。若干のすぐれた例外は存するけれども、かなり多くの東洋学者はこれを避けて、つぎの二つの方法に逃げた。一つは、

それと断らずに、原文を摘要すること、今一つは、これもただちに意識すること。これではともに原文が消えてしまふ。このやり方は、奇妙なことであるが、日本人翻訳者の方に一層多い。彼等は自らの外国語法の知識を見せるために、自国語原典の獨創性を抹殺し、それらの作者に洋服を着せた。その方が外国人に理解せられやすいからだといふのである。今はこれを避けて、ときには読者を退屈させることをも厭はず、詳しい註をつけた。これは日本文芸が、他の日本芸術と同じく印象的なもので、的確な断言よりはほのめかしに頼り、言ひをへない遠い見通しを読者に推量させるものであるから猶更必要だと思ふ。しかし第一には、前の原文によって後の原文の理解を助ける方法をとるのに意を用ひた。「古事記」のほとんど一卷全部（上巻、神代之巻）を載せたのはその後に出る神話への疑問に答へるため、「古今集」の序を出したのは、後の多くの詩歌の精神や意味の理解に資するつもり、である。

つぎに日本語のローマ字表記について。母音はイタリア語式に、子音は英語式にといふ羅馬字会のやり方には従ってゐない。この方法はすべての日本学者になじみの深いもので、著者にも研究者にも乃至英語の解る読者にも便利である。しかし、この表記法が新聞で盲目的に使はれたため、日清日露の戦争に関心のあるフランス人の大半は、地名や人名を讀違へた。この英語流綴りを採用しながら、それをフランス式にどう読みかへるかを断るといふことも出来る。しかしこんな二重手間をせしないで、直接にフランスの読者に便利なやうにしたら如何であらうか。しかもこの表記法は、多くの学者が正確なものとしてゐるにもかかはらず、実験音声学の立場から見て、一向正確ではない。例へば、英語の j で記され dji と発音せられることとなつてゐる日本語の音は、むしろ仏語の j に相当する⁽²⁾。かくて、理論上實際上の二つの理由から、周囲の母音と區別させるために英語流 w を保存した以外は、フランス人にもっと適した、一層簡単で一層科学的な表記法を採用した。

II 日本の歴史は大別して、支那文明渡来前、渡来後、西洋文明輸入後の三時代とすべきであらうが、この三つのそれぞれの間は判然と區別することが不可能である。よつて、従来日本で用ひられてゐる七つの時代区分をここにも一応採用する。（即ち、原始、奈良、平安、鎌倉、南北朝及び室町、徳川、明治とし、各時代の文学的概観をする。最後の明治時代の項に、種々な歐洲思想が輸入して、國民の心を捕へようと争つてゐることを目して）しかし、このヨーロッパ的革新は、徳川時代の支那的變貌（漢学、和漢混淆文の盛行など）と同じく、もはや日本文芸の領分とはほとんどいへない。かれこれ千年の昔の古典時代に最高の完成に達してゐた形態の美は、その後再び見出すべくもない。もしなほその昔の眞の光の名残を現代の文芸に求めようとならば、それはむしろ古い言葉を忠実に守る人々の短い詩歌のうちにであらう。

数知れぬ支那の語のために鈍重化した現在の言語は、将来における立派な文体の出現をほとんど予測させない。ただ日本人が、その最良の学者若干の言を容れて、その不合理な書方を捨て、純な国語への復帰に幸する表音的な書方を採用すれば別である。しかし、もっと確かなことは、豊かな文芸のみのりを得るかどうかは、長い平和を彼等が享受するか否かに依存する。（日本文芸の七時代をグラフ的に見て、奈良から平安へと最高頂に達し、鎌倉で急に下降し、室町で少し上昇し、戦国織豊で最も下り、徳川で奈良平安よりは低いが室町鎌倉よりは高まっている状態を述べて、平和の長い時期が文学的にも良い時代であったことをいふ。）

しかし日本が、その経済的繁栄とあひまって芸術の勃興を得る条件であるこの平和を持つためには、西欧諸国が日本に対して、遠くからの干渉をすることを止めねばならない。西欧諸国は、日本の長い間の平穏を脅し、その正しい誇りを傷けた後、これを武装せしめ、二つの戦争に投じた。しかも、日本人を真面目に扱ふことを長く拒んで来た後に、今度は一気に、危険な征服者であると見始めてゐる。家康からアメリカの最初の威嚇まで、この国民が平和に対する深い愛の上に立った政策に忠実であったことを、人は忘れてゐるのだ。われわれは日本人をもっとよく理解しなければならない。此の書の特に意図したところはそれである。といふのは、文芸はそれ以上の目的に役立つのでなければ、真に取るに足らぬものであるから。日本人が自らをありのままに示してゐるこの書を読んで、健気で感受性に富み、こまやかで快活であるその心、自然を愛好するその性格、その社会的優雅、博学、その諸芸術、すべて、高い文明の域にある民族をも魅するものを日本人が所有してゐることを知って欲しい。さうすれば、われわれ（西欧人）と多くの第二義的な点では異ってゐても、しかも彼等と同じ人間であることを認めるであらう。

以上の「序説」の後、四百三十一頁にわたって「抄」となる。前述した各時代に分け、これを la prose 散文と la poésie 詩歌の二つの大見出しに、更にそれぞれを二段、三段のこまかい部類分けにする。その大見出し、その下の小見出しには各々解説を附し、この解説はしばしば相当以上に、部類、作者、作物内容、その背景をなす社会について、詳細なものとなる。それから各作物の本文抜萃の仏訳。更に終始各頁の脚註。この註は、しばしば本文を遙に越える分量の、極めて詳しいものである。なほ、篇としてでなく、出典からみてその時代に入れた、奈良時代中の宣命（「続日本紀」より）のやうなものもある。選ばれた作物はつぎの如くである。

原始時代 記紀の歌謡三篇と水無月晦日の大祓祝詞。

奈良時代 文武天皇即位の宣命、「古事記」、「出雲風土記」、「萬葉集」。「古事記」は上巻の大部分を訳、一部を摘述し、中、下巻とも四十三頁、一著としてはこの抄中第一の量である。

平安時代 「古今集」その他の歌集からの若干の和歌，「伊呂波歌」。この「古今集」外の歌集からの選は，「萬葉」よりも詳しい。散文では「古今」の序，「土佐日記」，「竹取」「伊勢」「大和」「源氏」「今昔」の諸物語，「枕草子」，歴史物として「栄華物語」，「大鏡」の序。「枕草子」は三十頁にわたる。全体としてこの時代は書中第一の分量を占め，徳川時代をやや上廻る。

鎌倉時代 実朝の和歌一首，「百人一首」中のこの時代の和歌若干。「平家物語」「源平盛衰記」と「方丈記」。この最後の篇は二十六頁。

南北朝室町時代 「太平記」「神皇正統記」「徒然草」。この兼好の随筆は二十七頁。能の「羽衣」と狂言の「三人片輪」。この狂言が詩歌の大見出の中に入っているのは，能と一体なものを見たからである。

徳川時代 漢学者の著作として益軒の「楽訓」と「女大学」，白石の「折焚く柴の記」と「藩翰譜」，鳩巢の「駿台雑話」。和学者（国学者）のものとして真淵の「文意考」，宣長の「玉勝間」「菅笠日記」と「敷島の大和心を」の歌，篤胤の「古道大意」。小説の類では，西鶴の「好色一代女」，実録物の「大岡政談」，種彦の「田舎源氏」，馬琴の「八犬伝」，一九の「東海道中膝栗毛」，三馬の「浮世風呂」。詩歌は，宗鑑，守武以下の俳諧，特に芭蕉以後の詳しいことは当然で，これに附随したものとして俳文「鶉衣」の一節まで。狂歌，狂句の若干からやはりその類といふ意味で狂文として「浮世風呂」の序文。演劇では近松の「夕霧阿波鳴渡」の吉田屋と出雲の「仮名手本忠臣蔵」の六段目。

明治時代 福沢諭吉の「福翁百話」，芦花の「不如帰」，樗牛の「滝口八道」。韻文として，天皇皇后以下若干の和歌に新体詩，俳句などの二三篇。この時代は原始時代に次いで短く，解説ともわづかに二十四頁である。

(四) 「日本文芸抄」考証と批判

イ. 前置について

本書は日露戦終結の後五年にして出版せられた。日清戦争はともかく遠東の二国の争ひであったが，このたびは眇たる黄色人の一国が，本国と属領とが相接して一体となっていては世界最大の版図を持つ白人の国，世界最強の陸軍国を相手として堂堂の勝を占めた戦ひとなった。これによってわが国民の自負が増大したことは勿論であるが，今まで蔑視し無視して来た欧米諸国が，わが国に対して驚歎と畏怖とを覚え，それがさらに一方では猜疑と不信とにまで進んで行

かうとしてゐたことが、白人の側からするこの「序説」の前置にもよく窺へる。特にフランスは、日露戦争中は露仏同盟のある故にロシアへの援助に努めたが、本書の出た1907（明治四十年）掌を返すが如く日仏協約を結ぶに至った。さうしてそれを盾として、当時日本を頼って渡来してゐた仏領安南（現ベトナム）独立運動の多くの志士たちの国外追放をわが政府に求め、つひにこれを行はせた。このやうな背景を考慮に入れて本書に対すると、ルボンの言の至当なことを感ぜずにはをられない。

ロ．ルボン以前の日本研究家

切支丹時代からの文献は別としても、幕末から明治初期中期へかけて、欧米人（多くは日本に何かの職務で滞在したものであるが）の日本文芸に関する紹介、翻訳、評論の類はすでに相当出てゐる。若干の例を挙げても、サトウが *American cyclopedia* の第九巻（1874）に入れた *Japanese literature* は、まとまった日本文芸の紹介として最初の、また一応正確なものといはれる。ディキンズの *Hyak nin is'shiu* 「百人一首」の翻訳は、原文、ローマ字転写、語彙を併せて、ロンドンですでに1866に発行せられてゐるし、同じ人の *Chiushingura or the Loyal league* は、1875横浜で初版を出し、第二版からはロンドンに移された、「仮名手本忠臣蔵」の相当忠実な散文訳である。民話を集めて、日本の風俗習慣を詳細に説明したものでは、1871ロンドン刊の A.B. Mitford ミトフォードの *Tales of old Japan* 二巻がある。ドイツの方では、ランゲの *Das Taketori monogatari oder Das Mädchen aus dem Monde* 「竹取物語」の訳は東京で独逸協会の雑誌に出た後に1879に横浜から単行せられてゐるし、この人にはさらに「女大学」の訳もある。パリの *Ecole spéciale des langues orientales* 東洋語専門学校（現在の *Ecole des langues orientales vivantes*）の日本語の初代教授 Léon de Rosny レオン・ド・ロニーは、早く1863即ち幕末に *Recueil de textes japonais* 「日本文集」を漢字仮名まじりの楷行草三体原文、ならびに仏訳別別の小冊として、パリの *Maisonneuve* から出版してゐる。このロニーは日本へ来たことがなく、しかも文語で日本語の会話をした人だと聞いてゐるが、この頃から自らの学校の教科書兼一般学習者のために、*Cours pratique de japonais* 「実用日本語講座」の名のもとに、初歩から上級まで二十種の本を編んで同じ書店から出してをり、その最終篇 *Si-ka-zên-yô* 「詩歌撰葉」（仏語版の方では *Anthologie japonaise*）は1871のものである。

明治の中期以後には、欧米人の日本文芸研究の文献は、他の分野の日本研究書とともに数を増して枚挙にいとまがないが、目欲しい若干を引いても、彼等の書いた最初の一貫した文芸史として劃期的なものであり、今日からでも相当な価値の見出されるアストンの *A History of Japa-*

nese literature がロンドンで1898に発行せられ、さらにそれを追って、一層大きくはるかに充実したフローレンツの *Geschichte der japanischen Litteratur* が1906にライプツィヒで公刊せられる。この二つは今日までも、外国人で日本の文芸乃至文化一般を査べる人の有力な典拠となってる。原典の翻訳兼考究としては、チェインバレンの *Kojiki*, フローレンツ及びアストンの各々の *Nihongi* をはじめ、チェインバレンは日本詩歌の概説に「萬葉」「古今」その他の抜萃韻文訳、「羽衣」「殺生石」「邯鄲」「仲光(「満仲」)」の四つの能、「骨皮」「座禪(「花子」)」の二つの狂言を加へた *The Classical poetry of the Japanese* を1880ロンドンで出した。ディキンズは *Primitive and mediaeval Japanese texts* と銘うった浩瀚な書をオクスフォードで1906に出版して自らの翻訳と研究とを総括するが、中に五十八頁の詳細な「萬葉集序説」に続いて三百三頁の「萬葉集」、さらに記紀の歌、「古今」の序、「百人一首」と「古今」の歌と俳句との若干、加ふるに能の「高砂」を含めてゐる。早くロニーが先鞭をつけたフランスは、文芸ではないが芸術関係のものに、前述のゴンクール「歌麿」「日本美術」「北斎」といふ有名なものがそれぞれ1891, 1893, 1896に出てをり、また演劇の面で A. Lequeux ルクーの小冊 *Le Théâtre japonais*「日本演劇」の後、Alexandre Bénazet ベナゼの *Le Théâtre du Japon*「日本の演劇」が1902に *Annales du Musée Guimet* の一部として刊行せられた。これにルボン自身の、前に挙げたいくつかの著書報告を加へるべきである。

このやうな先人と自らとの研究の後を受けたルボンが、フランスのみならず全欧米に倣けてゐた「原典本位で、一貫した日本文芸の概観」といふべきものを公けにしたのはよい狙ひであった。勿論彼のいふ「十二世紀以上の」ぼう大な資料を駆使してそれを行はうとするならば、一冊の小型本では足ることではない。しかし、これは最初の試みであり、それ以上に詳細なものは、時代とか部類とかに分けた少くともこの二倍三倍の選集にむしろ譲るべきであり、原典の間隙を埋めるのに詳しい史的解説や註釈を以てした用意は、日本文芸研究のその後の一つの足がかりを示したものとして、一応成功してゐるといへよう。その後この計画を踏襲してさらに完全、さらに大部なものを作らうとする試みが、私の知る範囲ではフランスの内外を問はず、日本文芸に関しては実現してゐないだけに、ルボンの着眼の凡でなかつたことが首肯出来る。ルボンがこの書を編むにあたって参考とした資料は、その「序説」の中に彼の挙げた人人のものであり、それは私もただいま記述した通りである。ルボンは自国フランスの日本研究の先輩については一言も称へてゐないのみならず、多少それらと反撥するやうな言さへ吐いてゐるが、たとへ英独などの諸家の著訳のやうに真に学的な価値のあるものが少かつたにしても、多少なりとも益を受けたものはあつたに違ひないのに、感心しないことである。

「序説」に挙げた日本側の研究文献の内芳賀矢一では、ここにいふのは「国文学史十講」（明治三十二年）あたりであらうし、藤岡作太郎では、その「国文学史講話」（三十一年）及び大著「国文学全史」の初巻「平安朝篇」（三十八年）などであらう。鈴木とは鈴木弘恭「新撰日本文学史略」（二十五年、青山清吉版）か、鈴木暢幸「大日本文学史」（日吉丸書房）であらうが、後者はルボンの書の発行の前年末に出たもの故、自らの書を編むのにこれをパリで参照する時間があったかどうか。三上高津の「日本文学史」二巻は明治二十三年初版（金港堂）で、これに落合直文の跋文があるのを鈴木に結びつけて鈴木落合といったのか。同じ書を教科書向にした「日本文学小史」（二十六年、金港堂）には落合の名はない。従って鈴木落合二人の選んだ集とは何をさすのか詳かでない。

ハ. 助手と協力者

一休ルボンは、日本文化や日本文芸にいつから関心を持ち、また日本語をどこで習ったものか。私はこれを、彼を直接知ってゐた、あるひは知ってゐたであらうと思はれる若干のわが国人及び在日のフランス人に質したが、結局それは判然としなかった。しかし、ルボンが東大にあったときの学生であり、卒業後外国留学をする前に二度ほど彼に会はれたことのある山田三良氏（山田氏は英法専攻であったので、教室でも研究室でもルボンの教へを受けたことはなかった由）の言葉によると、「北齋の研究」でフランスの学位を得た後、明治三十年ごろ即ち日本在住四年以上の折の彼の日本語は、たどたどしく、全くの片言であった、日本の書物もよく読めなかったと思ふ、助手を使ひ、それに日本の資料を訳させて、自分が手を入れたらしい、さういふ例はその後やはり日本について立派な研究書を出した他のフランス人にもあったことだ、とのことである。また子息ルイ氏も、「渡日以前には、父は日本について何等特別な知識を持ってゐなかった」と書いてをられる。ただし、ルイ氏は三十一年即ちその父が日本を決定的に離れる前年に東京で生れて、渡日前は勿論在日中のその生活についての自らの記憶は全くないといつてよいこと故、帰仏後父から種種のことを聞いたにしても、このあたりの知識は必ずしも正確ではあるまい。しかし、前掲邦訳「日本文明史」の序に梅謙次郎が、ルボンが職務のかたはら日本の文物特に文明の歴史の研究に力を用ひ、これに関する欧文の著作を渉獵したのは勿論、「我邦の書籍と雖も其資料となるものは力めて之を蒐集し、邦人、私人各一名の助手を置ひて之が研究に従事した」と述べてゐるのは信用してよい。会話には不自由でも本はある程度もしくは非常によく読めるといふのは、ルボンだけでなく私人のみにあらず、日本でも数の少くない例である。しかし来日前にパリで、当時公けの学校としては恐らくただ一つ日本語を教へてゐた「東洋語専門学校」に一時

聴講でもしたか、それとも個人からでも日本語の初歩くらゐを教はったといふことが仮にあったとしても、どうもルボンの日本語学力といふものは、少くともわが国在留の當時には、決して大したものではなかったのであらう。

それならば、梅のいふ邦人及び仏人各一名の助手とは誰であったか、それは未だに判明しない。一方、帰仏後のルボンは、そのソルボヌ（パリ大学）においての講義の手前もあり（それが日本の原典をそのまま解釈したり説明するものでなかったにしても）、わが国文を読む力が次第にある程度まで進んだことは事実であらう。さうして、帰仏後に著した「神道」その他神道関係のものを出すころには、たとひそれらに関する英独などの先人の労力があつたにはしても、また在仏の日本人の協力が得られたにしても、自らも日本の資料を直接ある程度は読んだものであらう。その後の「日本文芸抄」に至っては猶更である。

しかし「日本文芸抄」は彼一人で成つたものではない。後藤末雄氏は、ルボンがこの書を著すのに助手乃至相談相手としたのは、後に第一高等学校のフランス語主任教授となつた石川剛氏であつたらうといはれたし、牧野英一氏は、後の早稲田大学政経学部教授の五来欣造氏だと思ふ、と市川秀雄氏を通じて回答せられた。石川氏は明治四十年、東大法科大学在学中に文部省在外研究員としてパリの文科大学に入り、同四十三年、文学博士の学位を得て帰朝したし、五来氏は明治三十三年同じく東大法科大学の仏法を出て、三十七年からフランスに七年ドイツに二年在留、その間パリとベルリンの両大学に学んでゐる。五来氏はフランス滞在中、相当な期間東洋語学校の日本語の *répétiteur* 外人教師をも勤めた。さうして、ルイ・ルボン氏も、この二人がしばしば父君のもとに来訪し、特に（休暇に）パリ外ル・ムティエ・ドルジュリュスの別荘に二三个月も家族の如くに滞在して、翻訳の手助けをしたことを、よく記憶してゐる、とせられる。このころにはルイ氏も十一、二歳になっていたわけ故誤りはあるまい。二人はその仕事において父君と長時間議論をし、作者の精神を尊重しながら *à la lettre* 文字通りに如何に忠実適切に表現するかに、ときには一首の短歌一つの俳句にも一日以上を掛けた。この二人以外にはこのやうに父君を助けた人は覚えてゐないが、なほ他の二人、山本といふ人が何回か来訪して父君の日本研究に貢献したし、東洋語(旧専門)学校の教授 *Dautremer* ドトルメールがやはりしばしば日本の諸芸術の話をも父としてゐた、といはれる。山本といふのはどの山本氏か、あるひは画家山本芳翠かと思つたが、彼は1887年に帰朝してゐて問題にならない。ドトルメールも今は故人となつた。

以上のやうな故、この石川五来両氏がルボンの帰仏後の「日本文芸抄」その他の著述に貢献してゐることは確かである。石川氏は在仏中 *Etude sur la littérature impressionniste au Japon* 「日本の印象主義的文芸についての研究」といふ書（学位論文と思ふ）をものし、「日

本文芸抄」と同じ1910にパリの A. Pedone から出版してゐるが、その中に採った日本名のローマ字表記の原則は「文芸抄」のルボンのそれと全く同じで、表記の実例も大方は一緒であるし、脚註にしばしばルボンの「神道」その他の著書を引いてゐる。ただし、その研究中に引用した「方丈記」「徒然草」「枕草子」の仏訳は、ルボンのものと異り、大体においてルボンの方がさらに直訳的である。なほもう一人、杉山直治郎氏が、明治三十六年の仏法出で、三十八年から四十年欧米留学をせられてゐるし、フランスに關係の深い人であるから、いくらかでもルボンにつながるがなかつたか、ルイ氏が山本といふのはあるひは杉山の間違ひではないかとも思つてみたが、「ルボン氏の文学活動のことについては全く知らない」といふ代筆の返事を、病中の同氏からかへて貰つてゐるので、さうかと思ふより仕方がない。

石川氏は年齢の点でルボン在日中に彼を助けたとは考へられない。五来氏の方はルボン離日の二年前に東大へ入学した勘定になるから、あるひは学生としても手助けをしたかも知れない。それにしても、「北齋の研究」などの成る前であつたかどうかは疑問である。そのほかに当時の国文その他の日本人専門家とも、ある程度の交渉は存したとも考へられなくはない。

二．原典の選択と著者の主張

第一に、ルボンは最も日本的、日本人的な部類や作物を選んだといふだけに、漢文をもって書かれたものは一切排除してゐる。これは外国の文学史、たとへばフランスのそれなどにおいても、漢文と似た役目をその国において果したラテン語の文献、それからプロバンス語とかブルターニュ語とかの地方語で書かれた作物やさういふ言語をもってする文芸活動のことは、フランス文芸の埒外のものとして、大抵の場合一切触れないか、極めて簡単にしか言及しないのだから、何もルボンに始まつたわけではない。しかし彼以前のアストンやフローレンツに比しても、その点が一層厳しいのは事実である。「文芸抄」の引用は、アストンもその「文芸史」に引く「日本書紀」神武天皇の件の「いまはよ、いまはよ、ああしやを、いまだにも、あごよ、いまだにも、あごよ」で始まつてをり、解説脚註の部にもこの「古事記」と並ぶわが最古の史書の名は逸することが出来なかつたけれども、それも触れることが少い。その他では、現存する最初の漢詩集である「懐風藻」も、文芸衰亡の鎌倉期にただ一つ漢文芸を守つた所謂五山文学も、その名その事実さへ現れて来ない。ずっと下つて、「大日本史」「日本外史」も、その時代を説くのにひとたび名が出てくるだけである。

神道や記紀については、先人の研究が多く、ルボンもその後を受けてすでに「神道」をはじめ若干の報告や論文をものした後であるし、本来が法律家であるところから、日本古代の神政、神

道から発する法制については特に関心があったらう。されば彼の場合も上代のことに詳しく、自身の言に依るごとくにわが国の神話を知らしめるために「古事記」に最大の紙面をさいたのは当然である。ルボンの神道観を彼の先人達のそれと比較して論ずることは、私にその方面の知識が少く、かつ主著「神道」が飛びとびの数分冊しか近くに見られないので不可能であるが、ともかく自ら一個の權威をもって任じたには間違ひない。これに比すると、人麻呂、赤人、億良、家持の長歌各一篇、旅人の短歌十三首だけで「萬葉集」をすませてるのは、甚だもの足りない。これだけ簡単にした理由も何等述べられてゐない。

わが文芸の完成時代である平安朝が、「文芸抄」中最大の頁を占めてゐるのは当然であるが、原典を示すのに特に力を注いだのは「枕草子」である。これは石川剛氏が後の時代の「方丈記」「徒然草」とともに丁度自らの研究をこの方面に致してゐたのでその援助もあつたらうし、元來が一つ一つ短く独立した随筆であるから、抄をするにもやり易かつた。その上に、日本の特色と同時に、フランスにも La Bruyère ラ・ブリュイエール、La Rochefoucauld ラ・ロシュフコー、Joubert ジュベール (Montaigne モンテーニュまで遡らなくとも) といった男性の書いた人物批評や風俗観、箴言や随想があるのに対して、女性の側から、それも平安時代の宮廷女性は後の時代から見ればはるかに自由な面があつたとはいへ、一体非個性的であると見られた日本女性の側からする極めて個性的な作物であるといふ点で、フランス人に興味が深いと考へたのであらう。この見方はルボンだけでなく、日本文芸に関する彼の先輩にも多く見られるものである。ルボンは清少納言を称揚するあまり、フローレンツが取次いでゐる古來のいひつたへ「彼女は大変太ってをり大飲酒家であつたと言はれてをり、紫式部とは反対にその道徳的な行状は批難されてゐる⁽³⁾」といふ言を、認めがたいとさへする。「源氏」の方は、これに反して、西欧研究家の評価が必ずしも一定せず、最も酷い評には、アストンがその「文芸史」(原文p.97)で、またチェインパレンがその *Things Japanese* (p.265) で引用してゐる Georges Bousquet ブスケの *cette ennuyeuse Scudéry japonaise* 「この日本のたいくつなスキュデリー嬢」もある。ルボンでは、一貫した長篇の物語故萃を抜くのが「枕草子」ほど簡単でないためか比較的原文の分量は少いが、解説に至っては甚だこまかで多分に好意的であり、「源氏物語にあるやうなこまやかな心理描写は、かなり近頃までのヨーロッパ文芸には、求めるのが難しい⁽⁴⁾」としてゐる。

室町期の能に関しては、その形式の面においてギリシア古劇を思はせるものがあると同時に、實際的意図においてはむしろ中世の *Mystère* 聖史劇に近いところがあるとするのは、ある程度妥当である。しかし、猿楽の能が田楽を圧倒しあるひは吸収して進んだことを述べて、つぎのやうにいふのは如何であらうか。「この進歩の主な理由はおそらく、音楽を伴った古い黙劇の中

へ、支那から借りた戯曲的台詞を導入したためであった。事実、十三世紀においては支那演劇は特に隆盛を来した。ところで、この世紀の前半には日本僧侶の支那に旅行するもの多かつたことが注目せられ、後半においては猿楽が各宗教的中心で花を開いたことが目立っている⁽⁵⁾。能の支那縁起説は、古く白石、駿台などの漢学系統の人に称へられ、ルボンの時代はもとより近頃まで伝はっているが、これを重く見ることは今では否定せられてゐるに近い。実際、いろいろな意味で支那的要素が能の中に導入せられてゐることは疑ふべくもないけれども、何も狭量な愛國的感情に駆られなくても、日本の黙劇に支那劇の台詞といった簡単なつぎ合せで能は成立したものであるのではない。

能が和漢の文章語句を盛に借来って所謂「つつれの錦」を織るのを、フローレンツは Plagiat 剽竊（「日本文芸史」原文 p.375）と片づける。これはすでに、「本邦文学史の嚆矢なり」と自らいふ三上高津の「文学史」にも、能は「古書の文句を剽竊すること極めて多きを以て、読者の妙なりと思ふところにては、忽ち其平語盛衰記、若くは太平記中の文章なるを覚り、啞然として笑ふこと屢なるべし」（下巻百五十四—五頁）と述べてゐることである。それを「実際には、これは自家の文にときに古い珠玉をちりばめるのを好む教養ある人の公然となした借用であり、この方法によって、知識ある観客の心に自家の芸術の詩的効果を倍加させようとしたものである⁽⁶⁾」とルボンの弁護してゐるのは（parfois「ときに」といふ語が少しくすぐたく「ときに」どころではないのであるが）、能楽乃至その謡曲の礼賛者から感謝さへ買ふであらう。三上高津の時代は、能が維新後の衰亡から苦難の時代を経てやうやく復興しようとしてゐたときで、まだこの方面の研究も盛でなく、国文学者の中にもこの点についての具眼の士が少かつたので無理もないが、明治も三十年代から四十年代へ掛けては、舞台にも名人が揃ひ、鑑賞研究も盛となつて来てゐたのだから、日本人の側からもこのくらの言は出て当然であつた。

ルボンは徳川期の俗文芸に関しては点が辛い。一九や三馬が日本人の快活陽気な一面を最もよく示してゐると推称するのは、すでにアストン（p.372前後）以来いはれたことであるが、自笑其頤の所謂八文字屋本を一概に卑猥であるといふに止つて、もともと大した文芸ではないにしても、社会の一面を写したよき意味のスケッチのあること、明治大正（乃至今日）の世相から見ても興の深い諷刺のあることには言及しない。これはアストンやフローレンツよりももっと狭量かつ理解の浅いことを示すもので、一つはやはり彼の法律家的性質が露呈せられたものと考へられよう。馬琴については、ルボンの先輩たちもほとんど一樣に、明治期のわが国の一般読者が最大の小説家として彼をもてはやすことを認めながらも、その筋立の不自然さ、散文の中に韻文的要素をそのまま混入する作風、学術的かつ道德偏重的な態度を高く買つてゐないけれども、なほ彼の

気骨と志操、博学、驚歎すべき労作には敬意を払ってゐる。その小説の中では、一体に「弓張月」の方が「八犬伝」よりも結構の整備、不自然さの少い点、人物が道德の傀儡となりきつてゐないためなどで好評を得てゐる。その「八犬伝」をルボンは、「荒唐無稽な冒険遭遇に終始する、退屈きはまるぼう大なお話⁽⁷⁾」とする。さうはいひながら、そんなに退屈でない他の篇の名さへ挙げようとはせず、しかも「八犬伝」の中でも、従来引用せられて来た芳柳閣上の決闘などの場面でなく、犬飼現八が庚申山に山猫を射つ件を原文として引いたのは、皮肉な態度である。なほ、馬琴の小説中ただ一つ、最も写実的で、いはば西欧自然主義的ともいへ、こちたき学術的態度も少い「近世説美少年録」を、ルボンは勿論アストンもフローレンツも全く無視してゐるのは、この作が未完のため、あるひは好色的なためばかりではあるまいが、不思議なことである。もとが支那種といふなら他の馬琴作とて大同小異のこと。翻訳「新編水滸画伝」（それも馬琴の手になったのは始めの五分の一ほどに過ぎない）や「通俗金鰲伝」の全くの翻案である「風俗金魚伝」まで挙げてゐるフローレンツにしてなほしかり。尤も「美少年録」の如きは、所詮ルボンの好みに合ひさうにはないけれども、先人選が取上げてゐないので、その名も知らなかったかも知れない。

歌舞伎、浄瑠璃の方では、院本物でない歌舞伎については、南北も黙阿弥も乃至五瓶も、一人として名前さへあがってゐないし、そのやうな劇の種類があつたことさへ記してない。これはもう一度時代を遡って、能の狂言にも申せることで、能自体の価値はともかく認めてゐるが、狂言については評価が甚だ低い。狂言には真の喜劇は求むべくもないとして、「俗な散文と兎戯に類した機智で組立てられた短い *fantaisie*⁽⁸⁾（半 即興的道化芝居とでもいほうか）」とする。たしかに狂言は真の喜劇ではあるまいが、それならヨーロッパの *farce* 笑劇はどうであるかといひたい。フランスにおいても、十七世紀にモリエールの傑作喜劇を生みだすには、中世から近世初期へかけてのフェルスが非常に貢献したし、モリエール自身の戯曲にもフェルスのものは少からずあつて、今にもてはやされてゐるのではないか。中世フェルスとほぼ時代を等しくする室町期のこの演劇を、ゴール精神の持主であるルボンは理解し得なかつたのは残念である。

ルボンの明治時代の部分を、アストン、フローレンツ両者の「文芸史」のそれぞれの全体対明治期の割合と比べると、最も早く出たアストンと最も遅い彼とがほとんど量的に等しく、中に挟まれたフローレンツが一番少い。つまりアストンは取扱ふ時期が最も短いのに、一番偏ることの少い考慮を日本文芸全体の流れに対して払つたことになる。内容的に見れば、英独両者は実例を多く示さない歴史であるので、小さい紙面に多くの人名作名を引いてゐるのに対して、実例に重きをおく仏の選集では、極めて少い種類のものにししか触れてゐない。逍遙は主として「書生気質」

の著者として挙がり、「小説真髓」の名は見えず単に馬琴の敵として立ったといふだけであり、演劇の方でも福地桜痴の名は出ても、彼のことは表れない。紅葉と露伴とはともかく簡単に述べてあるけれども、隲外の名は出ない。彼の文芸理論やその初期の創作は、「もはや日本文芸の韻分ではない」のであらう。原文の実例として、思想、哲学としての「福翁百話」、小説としての「不如帰」、戯曲としての「滝口入道」といふ取合せは、ルボンの考へや好みを窺ふものとして、註釈の要を認めまい。詩歌の方では、しばしば伝統の形式の中にあるひはバイロン、あるひはハイネ等々から借来った内容を盛ってあるので、日本人には珍奇だがヨーロッパ人には平凡乃至噴飯物であることをいふ。「この時代においても、最良の詩歌は、古典の語と日本的発想法とを忠実に守って、新しい事象についての思考をそれに盛ったものである。この点においてはいくら守旧的であってもよい。他の諸芸術にも増してその詩歌のうちに脈打つかの印象主義（西欧的フランス的印象主義と異なることに注意）的天分を彼等が捨てた場合、もはや、低級な模倣から成る、独創の缺けた、魂のない文芸しか残らないであらう。幸にも最近の若干の詩歌は、この日のなほ遠いことを示す⁽⁹⁾」とする。しかしそのつぎに引かれた実例では、天皇皇后、特に明治天皇の歌は当時だけでなく今日でも別に挙げてよいものとして、その他は世相史的にはともかく芸術的にはほとんど問題にならないものがある。かく見て来れば、ルボンの新しい時代の文芸に対する理解は、一般ヨーロッパ人がわが国の絵画に対した場合、他は支那的でなければ西欧模倣に過ぎないとして、ひとり浮世絵を純日本的として称揚した態度と、大して差がない。

「序説」にいふ、新しきよき文体を生むために表音的な書方を採用すべきだといふ意見は、わが国における漢字制限、仮名書、ローマ字書の主張を反映させたものでもあり、当時から今日までのこの方面の種種の運動や実施と考へ合せて興味がある。また、日本が長く平和を享受するためには、歐洲諸國（勿論アメリカをも含めて）が日本を挑発することを控へねばならないとして、開国までの日本人の平和的態度を称揚してゐるのは、明治中期からこちらへ好戦的だと見なされて来た日本人としては、大いにルボンに感謝せねばならぬところであるし、たしかに正確である。しかし、開国も富国強兵も、外国の干渉や挑発だけがもとになったものではなくて、日本人自身の本能や意志があったことを考へれば、事の一面のみを強調したものであるといへる。自らの書の意図は日本人をヨーロッパに理解させることであり、文芸は、さういふ自ら以上の目的に役立たなければ存在意義がないといふのは、やはり彼の法律家としての本来の面目が出たものともいふべきであらう。

ホ. 翻訳の方法

ルボンがとった原文仏訳の実例を並べることは紙数の関係で不可能である。わづかに韻文と散

文とから一つづつを引用して、一斑をもって全豹を卜してもらふこととする。

や せ 蛙	Maigre grenouille,
負けるな一茶	Ne cède pas: Issa
これにあり。(一茶)	Est ici.

ルボンのいふ、「しばしば語と語とは原典と等しく、行と行とは常に等しい」といふ主張が最もよく表れてゐる例である。これを1934の Georges Bonneau ジョルジュ・ボノー *La Sensibilité japonaise* 「日本的感性」中のものと比べてみる。この方には親切に題詞まで附してある。

A la plus maigre des	(二匹の蛙のうちの
deux grenouilles.	やせた方へ。
Grenouille maigre,	やせ蛙,
Va, tiens bon! Issa vient	さあ, しっかり, 一茶が
A ton secours!	助けてやるぞ。)

この二つを比べて、ある日本人フランス語学者は、一般フランス人に見せた場合ルボンの訳では全く一茶の句の真意が理解せられないとして、ボノーの方を称揚してゐる。しかるに私の知る一フランス人（八、九年日本に住んで、日本文は大して読めないが話はかなり出来る）の意見を求めたところ、彼は言下に、ボノーのはフランス詩でもなければ日本詩でもない、せいぜい卑俗な会話に過ぎないとして、ルボンに軍配をあげた。人それぞれの境遇や教養に従って種々な見解は出て来ようが、以上の意見は十分尊重せられてよからう。

やまとうたは、人の心をたねとして、よろづの言の葉となれりける。世の中にある人、事わざしげきものなれば、心におもふことを、みるもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。

(「古今集」序)

La poésie du Yamato a pour semence le coeur humain, d'où elle se développe en une myriade de feuilles de parole. En cette vie, bien des choses occupent les hommes: ils expriment alors les pensées de leur coeur au moyen des objets qu'ils voient ou qu'ils entendent.

散文では俳句や和歌ほどに翻訳法の違ひは出来にくいし、つぎに引くディキンズの英訳 (*Primitive and Mediaeval Japanese texts*, p.379) は、ルボンのものより年代が古く、かつ忠実であって、さほどの差がないけれども、やはりルボンの方が直訳的である。

Our native poetry springs from the heart of man as its seed, producing the countless leaves of language. Multitudinous are the affairs of men in this world, what their

minds think, what their eyes see, what their ears hear they must find words to express.

勿論ルボンもディキンズも、これに説明的な註を附することを忘れない。要するにルボンはそのいふ如く、「現地人の思考を写真にとる」方針を貫いたわけで、これはしばしば稚拙であるとか、註があってもその註を読まない読者や、まして註なしで転載引用せられた場合には、一茶の前掲の例に見る如く、理解に苦しむとせられる恐れがあるから、たしかに作家訳者として辛いことであった。しかも彼は二度もアカデミー・フランセーズの散文賞を受けた名文家である。しかし純文芸の翻訳といふ点では、やはりいくらか筆の堅い傾きはあったと思はれるので、正確を第一として他の要素を避けたのは、自身にとっても賢明であった。のみならず、この「文芸抄」のやうに種種の要素から成る文章詩歌を集めて独力で筆を下し（たとへ協力者の助けがあったにしても）、日本文芸のいろいろなひな型を提供しようとする場合、さうして全く異質な文芸の知識を、ある程度かうしたことに理解と鑑識眼とを持った読者に与へるには、このなるべく無色で直訳的な写しかへのやり方が、結局においては良かったと思へる。それが却って原典の精神をうまく表現することにもなったのである。

へ. ローマ字表記の方法

日本の人物事のローマ字表記の件でルボンのいふ羅馬字会は明治十七年に出来て、所謂ヘボン(J.C.Hepburn)式を採用した。外国人の多くは、羅馬字会式と名乗るか名乗らないかは別としてこの会の方法をとり、アストンは自らの「文芸史」の序に Royal Geographic Society のやり方に従ふといひ、チェインバレンの *Things Japanese* やフローレンツの「文芸史」に断つてあるところも、英独語の約束によって多少の相違はあるが、大体それを踏襲し、必要に応じて音の区別をもっと詳しくしたものである。ただし、同じチェインバレンの *The Classical poetry of the Japanese* には、もっと極端に Mañyefushifu (萬葉集) の如くマンエフシフを忠実に写したやり方をして、実際はマンヨーシューなどと読まれるとするし、ディキンズの如く、その上にさらに ádzuma (東) や kanáshimi (悲しみ) のやうに東京語式アクセントの所在やアクセントの起点を示したものもある。しかし一般には明治現行の発音に従ひ、所謂「母音はイタリア式に、子音はイギリス式に」行はれてゐたが、ルボンはこれを、自己の主張に従つてフランス語流に徹底させた。

江戸 Yedo (アストン) Edo (ルボン) (大文字ゆえEの上のゝを省く。)

家康 Iyeyasu (アストン) Iéyaçou (ルボン)

勿論ルボンのゝは音の高さを示すのでなく、éの場合フランス語のエの音に近いことを見せた

に過ぎない。所謂アクセントはチェーンバレンもルボンも、「大して強くない、ほぼフランス語に対するやうなつもりでよい」といふ主張である。

以下ルボン流の若干の表記法をあげる。

安倍 Abé 蕪村 Bouçon 大納言 daïnagon 義太夫 ghidayou
源氏 Ghennji 平安 Héian 白石 Hakoucéki 膝栗毛 hizakourighé
金葉集 Kinnyôshou 神道 shinntô

エン、インはフランス語では表はしにくい、ルボンは enn又は inn と n を重ねることによって、[ã] [ɛ̃] などと発音せられないやうにした。ou はス、クなどの母音のつもりであり、ワなどの半母音の場合は wa とすることは、自らいふ如くである。ただ、シュの子音はshでchとはしないのに、チュの子音を tch とするのは統一を缺くごとくに見えるが、これは却って、特に気を使って誤読を避けようとした苦心の末であらうと思ふ。ツはtsだがヅはzとし、ヂとジとはともに j で、この部分が所謂ヘボン式であるのは、フランス語の標準音では [ts] はほとんど存在せず [dz] は猶更のことであるし、[dʒ] は特殊な語だけで他はすべて [ʒ] であることにも依るし、自ら断つてゐるやうに、東京中心のわが国語の音でも当時すでにさうなつてゐたからであらう。しかし、「栄華物語」の栄華を一応 Eiga と表して（この場合大文字だから e の上の ' は省いた）、註に京都の音では Eigwa であるとしてゐるのは、これは京都に限らないけれども、古音で東京語のそれと異なるもののあるのを知つてゐたわけである。長音は ô の如くする場合と、oh のやうにするとときがあるが、語の始めでは後者の方をとるらしい。ou のやうな二重母字を長音にする場合は、始末に困つたのか何も工夫してゐない。このやうにしておいて、一方で Manyôshou（萬葉集）の如く書いてゐるのは、マンヨーシューやマンニョーシューでなくて、マニョーシューと読まれる虞がある。アイ、オイ、ウイは ai, oi, oui。

彼は原仮名遣ひを強調して例へば Ihanaga-himé（岩長媛）や oho-harahi（大祓）の如くするの、一方では大阪も逢坂も一樣に Ohçaka とし、凡河内（躬恒）は Ohshikôtchi であり、返歌（反歌）は kaéshi-outa にしてゐる。第一もっとやかましくいふなら神道にしても、shinntôをもっと徹底させれば shinntaou になるはずではないか。そこまでしなければ Ihanaga も Iwanaga でよいわけである。

ルボンのこの表記法を、彼のさらに十四年前の著書「北斎の研究」と比べると、大きな相違がある。後者の序説においては、やはり羅馬字会式をとらないことを断り、「自分のやり方と羅馬字会式とは一長一短であるが、日本語に慣れず慣習的学者的な表記に親まない人に、羅馬字会式と同じ程度に正しく、一層快い調音を与へようとしたものだ」としてゐる。また、「東京の教養

ある社会の発音を取った。これは多分京都の古い発音よりは不正確であらうが、もっと音楽的に美しい」とし、非常に発音本位である。エイはすべて関東流にエーのつもりになる。

Hoksaï (北斎) Mkashimkashi Momotarô hottan ouacets (昔昔桃太郎発端話説)
Kçakimo nabikou… (草木も靡く…) Fkoudjoukaï mouriô… (福寿海無量…)
ouaraïghao (笑ひ顔) Taihéki (太平記) Eddo (江戸) Bébé kiôdan
(皿皿郷談) Djôrouri dzekkou (浄瑠璃絶句) kanndzashi (かんざし)

延ばす音にはすべて山形アクセントを付け、ザズヅゼゾの子音はすべてdzであり、ジヂのそれはともにdjである。これから後の神道関係の彼の記事では、勿論祝詞やその他の古代文の語を写したものが多くからでもあるが、はるかに漢字の原訓仮名遣ひに忠実になること、tatahé-goto (称辞), mawosou (申す) などの如くだ。かういふ過程を経て「文芸抄」において、彼の日本語表記法は一つの起着点を見出したわけであるが、なほ上述の如く原字綴りと現行発音との間に完全な統一がなされなかったわけである。

ト. 記述の正と誤

人名、地名、書物や事物の語の漢字の読方は、およそ外国人にとって厄介なもの見え（日本人にとっても容易でない場合が多いが）、どんな傑れた研究家のローマ字表記にも誤が見出される。それ故明治末年にルボンが犯したさういふものを、今日一一指摘するのは酷であるから、目立たいくつかの例を引くに止める。片仮名はその部分を抜出したものである。

Fouto-no-Yaçoumaro (太安萬侶 フト)

Kibi-no-Mabi (吉備真備 マビ)

sôtsouï-hôshi (総追捕使 ツイ-ホー)

Hôzenn (法然 ゼン)

Katsoubé Magao (鹿都部真顔 カツベ)

Ko-barou-hi (小春日 コバルヒ)

Riçan-henndo (粟散辺土 リサン)

事柄の理解の不十分または記述の不注意とみるべきものは更にこれより多いが、この場合もその少し大きなもの、目立つ点の二三を指摘するのに止める。

能の個所で、舞台の左側に choeur 地謡が坐るとあるのは役者の方から見てそれでよいとして、舞台の右側に orchestre はやし方がをるといふのはをかしい。地謡の位置から見れば斜右になるには違ひないが、舞台全体から見れば中央奥とせねばならない。尤も、奈良の春日若宮の舞殿など

の演能ではルボンの言に類するやり方をとってゐるが、一般にはさうではない。能が大抵一時間しかかからないといふのも誤で、重い曲や大曲になれば一時間半から二時間を要する。観世時代ならともかく、明治末期においてもこの点は同じことであつたらう。一方狂言には面を着けず、地謡を用ひないといふのも正しくなく、面はしばしば使はれるし、曲によって地謡のはいることも稀ではない。

竹田出雲には合作のほかには単独な作も相当あるとしてゐるが、出雲には有名な者に二代あり、先の元祖出雲には単独作の相当あるのに対して、二世（親方）出雲（はじめ小出雲）では、小篇一つの外は合作と認められる。ルボンが挙げてゐる「忠臣蔵」や「菅原」の作者はこの二世の方である。しかし、ルボンがこれを書いた時代には、日本人でもそこまでの区別は無理であつたかも知れない。「菅原伝授手習鑑」と「寺子屋」とを別の芝居のやうに書いてゐるのも誤である。フローレンツの訳 *Terakoya (Japanische Dramen, 1899)* と全曲「菅原」とが別別に脳裏に入ったものであらう。「忠臣蔵」の件で、浪士が泉岳寺で幕命を待ち、各大名へ引取られて、直ちに切腹するやうに取られる書方はチェインバレンの *Things Japanese* にもすでに見られるが、これは漢とした書方で、実際には元禄十五年十二月十四日に討入つて、翌年二月に切腹する。なほチェインバレン以来（もっと前の人があるかも知れない）ルボンも踏襲してゐる討入の日1703一月三十日といふのは、西洋流太陽曆に換へたものに違ひない。

風俗のことでは、「浮世風呂」の註に、「浴場においては、男も女も天真爛漫な混淆をなしてごちやごちやしてゐる⁽¹⁰⁾」としてゐるのは、全くの混浴のやうに取られる。明治以来はもとより、徳川時代においても、温泉場や不完全な旅館や特殊な場所を除いては、町中の銭湯では「男女入れこみ」は法度となつてゐたし、仕切は完全でなかつたにしても、男湯女湯の別の厳然とあつたことは、問題の「浮世風呂」を読んでもただちに判明することである。

ルボンの誤ばかりを挙げたので、つぎには彼の卓見とも思へることを引かう。清少納言の著書は *Makoura no Sôshi* であつて、断じて *Makoura Zôshi* ではないとし、「後のやうに発音すると、日本人には淫猥な本のことを思ひ起させる。1901にも、政府はこの名を持つ雑誌に発行停止を命じた。⁽¹¹⁾」これはアストンがこの二つの書方を混用してゐることへの訂正でもある。

「百人一首」による歌がるたの会が明治の日本でも甚だ盛なことを述べ、「黄色人を劣つたものと見る前に、老いも若きもフランスの最も美しい四行詩百篇を誦する、このやうに上品なカード遊びがあれば、と考へてみるべきであらう⁽¹²⁾。」

益軒の「女大学」の件。「東京に七年ゐる間に、ヨーロッパのあちこちの多くの家庭での醜聞を私は耳にした。しかるに日本の上流のどんな婦人も、そのやうな不名誉な嫌疑を受けたのを聞

いたことがない。日本の妻は夫を甚だ敬ってゐるので、さうした裏切などを考へない。それは彼女が奴隸であるからであらうか。断じて。(中畧)日本では、夫は妻に相談しながらも、妻を指導し、常に自分と同意見にさせるからだ。夫は優しく命じ、妻は笑って従ひ、一家は幸福な平和を維持する。この調和の秘訣は女大学の中にある⁽¹²⁾。」勿論ルボンのいふ上流社会においても、公然非公然の例外はあったし、「女大学」的教育に対しては、最近はいふまでもなくその以前からでも反撥はあった。それでもなほこのルボンの言には真実があることは首肯せられよう。

(五) 結 論

ルボンの「日本文芸抄」の第一の特色は、彼の日本及び日本人に対する思ひやり、共感、理解であり、この温い気持をもってこの書は貫かれてゐる。これはチェインバレンやフローレンツよりも一層はっきりした傾向である。このことは他の二人が日本人を好まなかつたといふためではなく、多分に民族性や個人の気質によって異なるのではあるが、理性に富む一方で最も芸術的な感性を持つフランス人の特性が強く出たものであらう。それ故ルボンはある場合には他の人人よりも一層端的に日本人を愛した。そのあまり、日本人の欠点を見逃し、または一種のひいきの引倒しの感をわれわれに与へることもあるけれども、この感情は珍重せられてよい。これは公表しないが、この感情の故かあらぬか、ルボンの人物については彼生前のフランス人の間で悪声を放つ人もあつたと聞く。しかし、それもルボンが日本をフランス人に理解させようとした努力に比べれば大したことではない。

つぎには当然この「日本文芸抄」が欧米に与へた影響に及ぶべきであるが、すでに予定の紙数をはるかに超過したので、それは他の機会に譲ることとしたい。

註

(1) 履歴については、本文中に記した資料のほか、辞書では *Dictionnaire encyclopédique Quillet* とイスペインアの *Enciclopedia universal ilustrada*, Madrid, Espasa-Calpe, 1926に出てゐる。そのほかでは英独伊米その他北歐の代表的辞典には見当らない。 *Qui êtes-vous?* 1924, Paris, G. Ruffly の記事はルボン自身の回答に依つたもの。わが国では戦前の「大百科辞典」(平凡社、昭和九年)及び「大辞典」(同社、昭和十一年)のみ。この二つにルボンの来日を明治二十一年とするのは何によつた誤か。なほフランスからは Monsieur Louis Revonが一切について懇篤な返事を下さつた以外、パリ大学文科大学の Madame Semin,

Service du personnel から貴重な資料を与へられた。わが国では（東京）日仏会館からも回答を得た。著書に関しては辞書と Louis 氏からの資料のほか、パリの Monsieur Jossierand, conservateur en chef, Bibliothèque Nationale の名で送られた書翰と蔵書目録の写しとが大いに役に立った。

ルボンのことについて直接お目にかかったり書面を以て教へを乞うた老大家の方々は、本文中に記した以外にも少くない。一々お名前を挙げるべきであるが差控へて、略儀心からの御礼を申しあげる。

なほ、本文中に統一のために敬称をすべて「氏」としたことをもおことはりする。

(2) 東京で作られ1903にパリ大学へ学位論文として出された Ernest R. Edwards : *Etude phonétique de la langue japonaise* といふ書を引いてゐる。

(3) フローレンツ著、土方定一、篠田太郎共訳「日本文学史」（楽浪書院、昭和十一）第三百三十四頁に依る。これ以外に(四)の(㊦)の中に挙げた欧米人の著書は、この書をも含めてすべて原典のことである。

以下「日本文芸抄」記事の頁は、括弧の中へ入れて引用したもののみについて挙げる。

(4) P.177 (5) P.309 (6) P.310 (7) P.360 (8) P.312 (9) P.449 (10) P.377

(11) P.197 (12) P.234 (13) P.321

補遺

(1) はじめ全体の分量を制限しようとしたため、ルボンの繙訳の方法についての考究が不十分であった。この補ひは他日果したい。

(2) 「北斎の研究」は、国会図書館で飛びよみをしたのだが、その後ルイ氏から一本を贈られてゆっくり読んだ。ルボンは北斎を、自然を写すに最も妙を得、人物これに次ぎ、神仏靈異に最も拙いとし、人物中では庶民がよくて上流や英雄偉人には気品を缺くし、神仏等では低い階層や俗間伝説のものに巧みで、崇高さは求め得ないとする。北斎の価値は、手材が非常に範囲の広いこと、着想と筆致との真率なこと、また東西洋を合せた将来の日本絵画への橋渡しの人としてである。なほ、北斎が欧米人に受けた別の理由は、一つはその芸術に彼等のそれと共通のものがあること、今一つはその作品が欧米のコレクションで容易に見得ることにあった、としてゐる。

(3) 本文に省いたが、ルボンの「神道」は、明治聖徳記念学会紀要第八卷（大正六年十月）に、田中経太郎訳で冒頭四頁（訳文で）があるが、続きは見付からない。また補永茂助訳述「欧米人の神道観」（大正九年、皇学書院）中に五頁余略述してある。ともかく、他の多くの西欧人よりも神道を高く見てゐることは確かである。